

皆様こんにちは。運輸総合研究所の会長をしております宿利正史です。

皆様、本日はそれぞれにご多用の中ではありますが、シンポジウム「東京圏の鉄道の課題と展望」に、大変多くの皆様にご参加をいただいております。ご参加の申込では、全体で約1400名を越える大変多くの皆様にお申込みをいただいております。

誠にありがとうございます。

本日のシンポジウムは、国土交通省の後援を得て開催するものであります。来賓として、国土交通省の藤井直樹国土交通事務次官に出席をいただいております。後ほどご挨拶をいただきます。藤井次官におかれては、公務ご多忙の中ではありますがご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

さて、皆様ご承知のとおり、今年の10月14日は、我が国に鉄道が開設されて150周年の節目の日でありましたけれども、この日ははさんで、各地で様々な行事あるいは取組、報道が行われております。

比較的早いタイミングでありました9月21日には、私どもの研究所と東日本旅客鉄道株式会社とが共催をいたしまして、「鉄道開業150年記念セミナー～文明開化・技術革新の先駆者たる鉄道と発展する都市の歴史と未来～」を開催いたしました。

この記念セミナーも国土交通省の後援をいただき、当日は齋藤鉄夫国土交通大臣のご出席をいただき、また、ご挨拶もいただいたところであります。

このセミナーの終了後、大変多くの皆様から、非常に貴重な大変示唆に富んだ感想やご意見を賜っております。

私どもは、それらを熟読、玩味しながら、調査研究活動に生かしてまいりたいと考えております。皆様のご協力に心から御礼申し上げます。

さて、150年にわたる長い鉄道の歴史の中で、とりわけこの3年間は、長引くコロナ禍の影響を受け鉄道需要が低迷し、鉄道事業者の経営にとりまして極めて深刻な厳しい局面となりました。先の150周年記念セミナーの基調講演において、本日も基調講演をお願いしております森地茂先生から、史実とデータに基づいて、戦前戦後の鉄道政策を振り返り、その上で、未来の鉄道を展望していただきましたが、その中でも、コロナ後に向けて、価値観の変容への対応、人口減少による人材不足への対応、そして、新たな空間創造と事業展開が期待されるということを提起しておられました。

当研究所は、今から54年前の1968年に運輸経済研究センターという名称で設立されて

以来、鉄道の整備・発展やそのための政策検討に役立つ数多くの研究調査を実施して参りました。加えて、最近では、グローバルで普遍的な課題として、脱炭素社会の実現に向けて、あるいは包摂性やウェルビーイングの実現、QOLの向上などに向けて、鉄道などの公共交通がどう応えていくか、ということも重要な課題と位置づけて、研究調査活動に取り組んでおります。

本日のシンポジウムでは、このような研究調査活動の一環として、在京の鉄道事業者6社と共同で、2012年から実施しております「今後の東京圏を支える鉄道に関する調査研究」の成果として、鉄道開設150周年のこの時期に、コロナ後に向けた対応という視点で今回中間的に整理された成果を報告し、これに基づいて、これからの東京圏の鉄道の課題と展望について討論をしていただき、また、考察を深めていただきたいと考えております。

まず、この調査研究を委員長として牽引していただいております森地茂先生から、「コロナ禍の影響も踏まえた今後の都市鉄道のあり方」というテーマで基調講演を行っていただきます。

次に、近年の就業構造の変化やコロナ禍によるワークスタイルの変化の鉄道需要への影響、また、鉄道沿線の魅力向上方策について、当研究所の3名の研究員から研究報告を行います。

続くパネルディスカッションでは、これからの時代の鉄道サービスのあり方や、沿線の魅力づくりのあり方とその課題について、森地先生にモデレーターをお願いし、この共同研究にご参画していただいている鉄道事業者6社の皆様で討論をいただくという段取りになっております。

基調講演とパネルディスカッションのコーディネータをお務めいただく森地茂先生、パネリストをお務めいただく鉄道事業者6社の皆様には、厚く御礼申し上げます。

最後に、このシンポジウムが、ご参加いただいております多くの皆様にとりまして示唆に富む有益なものとなりますことを心より期待いたしまして、私からのご挨拶といたします。本日、皆様方には心から御礼申し上げます。